

熟慮的ナラティブ生成モデル¹⁾

——行動準備を支える意味生成過程の理論的枠組み——

山内 香奈

《要旨》

本研究は、防災行動や健康行動のように、望ましい行動（目標行動）を理解していても実行に移せない現象に着目し、その前段にある心理的基盤を理論的に整理した。行動変容研究を概観した結果、未来をどのように意味づけるかが行動の生起を左右する可能性が高いことが示唆された。こうした未来理解は、因果関係・感情・価値・身体的感覚を統合しながら〈探索—構成—検討〉を循環させる心理過程によって形成され则认为られる。本研究では、この過程を「熟慮的ナラティブ生成」モデルとして提示した。

モデルの教育的可能性を検討するため、鉄道異常時の減災行動を題材に、成功と失敗の双方の未来物語を構成する課題と、プロット図・因果チェックリストを用いた協働的検討を組み合わせた授業実践を行った。分析の結果、未来の行動展開を物語として精緻化する効果が確認されるとともに、初期に保持されていた支配的個人ナラティブ（Dominant Personal Narrative: DPN）が〈探索〉や〈構成〉の方向づけに影響すること、また他者との検討によってその前提が相対化されうることが示された。これらの知見から、初期ナラティブの個人差や協働的検討の扱いをモデルに組み込むことが今後の課題として示唆された。

キーワード：熟慮的ナラティブ生成、行動準備、支配的個人ナラティブ、メンタル・シミュレーション、協働的検討

序 論

1.1 問題と目的

健康行動、防災・減災行動、偏見抑制など、さまざまな現代的なリスク領域において、「望ましい行動（目標行動）を知っていても実行に移せない」というギャップが広く報告されている。これは、目標行動を「知っている」ことがその行動意図を有するとは限らず、さらに行動意図を有することが行動に至ることにも直結しないことを意味する。この乖離は、単なる行動コストや動機づけの不足だけでは説明しきれないと考えられる。行動科学や意思決定研究は、人がリスクや行動結果をどのように理解・意味づけるかが、行動選択を方向づけることを示している（Rothman & Salovey, 1997; Edelson & Reyna, 2021）。また、未来の状況をどのように見通すかという心的シミュレーションの質が、適切な判断や行

動に関わる可能性が示されている (e.g., Klein, 1998). しかし、未来の出来事をどのように「意味づけ」するのかという心理的基盤そのものについては、依然として整理が十分でない。さらに、未来の意味づけの質を協働的かつ介入的に改善するための方法論も体系化されていない。

そこで本研究は、目標行動の生起を下支えすると考えられる未来志向の意味生成をどのような心理過程として捉えられるか、その構造を理論的に検討するものである。その際、意味生成を個人内に閉じたものとせず、他者からの視点提供や協働的な検討を通じて深められる認知的協働プロセスとして捉える。なお、ここでいう協働的な検討とは、他者との対話や批判的思考を通じて、自己が構成したナラティブに潜む偏りや盲点を点検し、より妥当で厚みのある未来理解へと導くことを意図する。

本研究では、目標行動をとった未来をどのように意味づけるかという心理過程に焦点を当てる。本研究の目的は、(1) この協働的意味生成プロセスを「熟慮的ナラティブ生成」として理論的に整理し、その構造と意義を明らかにすること、および (2) 大学の授業実践を通じて、未来状況に対する理解がどのように生成・修正されるのかを探索的に検討することの二点である。

1.2 本研究における主要概念の整理

本研究では、第2章以降でナラティブ研究、意味生成研究、メンタル・シミュレーション研究など複数の領域を参照するため、議論の前提となる主要概念（物語、ナラティブ、意味生成、熟慮）を整理しておく。

物語 (story) は、出来事を時間的・因果的な連鎖として再構成した表現形式を指す (Bruner, 1990)。一方でナラティブ (narrative) は、出来事や経験をどのように取捨選択し、意味づけ、全体として再構成するかという、より広い構成的・解釈的な心理過程を指す (Polkinghorne, 1988)。すなわち、ナラティブは意味を生成する過程であり、物語はその産物である。

Weick (1995) は、曖昧な出来事を「もっともらしい物語 (plausible story)」として構成し、意味を与える解釈過程として sensemaking を論じている。この過程は、人が状況をどのように理解し、どのように行動しうるかの見通しを形づくりとされる。これは、真実性 (accuracy) よりも「もっともらしさ (plausibility)」が重要であるという立場であると考えられる。なお、Weick (1995) の sensemaking は「retrospective (後向きの)」であることが本質的特徴の一つと述べているが、本研究ではこの枠組みを未来の状況理解、行動の方向づけにも適用し、未来の行動を支える意味の構築過程として検討することを試みる。

熟慮 (deliberation) は、直感的・自動的に作動する思考 (System 1) とは対照的に、注意を向け、努力を要し、複数の選択肢や結果を比較検討する統御的な認知過程として位置づけられる (Kahneman, 2011)。こうした熟慮は、推論や再評価を通じて判断を精緻化し、行動の妥当性を検討する働きをもつと考えられる。

本研究では、未来の状況をどのように想像し、その意味をどのように把握するかという心的表象を「未来理解」と呼ぶ。この未来理解を形成するための意味づけの働きを「未来志向の意味生成」と位置づける。意味生成 (meaning making) は本来、過去経験の再解釈として論じられてきたが、本研究で

はこれを未来の行動準備に向けて拡張し、その生成過程を〈探索—構成—検討〉という循環として理論化した枠組みを「熟慮的ナラティブ生成モデル」と定義する。

以上の立場に基づき、本研究では、これら三つの概念——ナラティブ、意味生成、熟慮——が未来の出来事の理解にどのように寄与し、目標行動の行動準備を支える心理的基盤としていかに機能しうるかを理論的に明らかにする。さらに、本研究では、未来状況の理解と行動準備を検討するための鍵概念として「支配的個人ナラティブ (dominant personal narrative: DPN)」を導入する。DPN とは、個人が未来の出来事をどのように解釈し、自分がどのような行動主体でありうるかを暗黙に規定する“包括的な物語的前提”を指すものである。これはポストモダン思想における近代社会を正当化する「大きな物語 (grand narratives)」(Lyotard, 1979) とは異なり、より心理学的・個人的な水準における意味づけの枠組みとして扱う。たとえば、「専門家に任せるしかない」「自分の行動は大した役に立たない」といった否定的な前提や、「自分の判断と周囲との協力が状況を改善しうる」といった肯定的前提がこれに相当する。こうした DPN は、通常は意識にのぼらないまま未来理解を方向づけ、行動準備の一部を構成していると考えられる。なお、この DPN は未形成な場合から、かなり強固な場合までさまざまな段階があると考えられる。

1.3 本研究の構成

本研究は、目標行動の行動準備として、未来の出来事をどのように意味づけるかという過程を、協働的精査を含む「熟慮的ナラティブ生成」として捉え、その理論的枠組みを提示する。本稿の議論の流れは以下の通りである。第2章では、行動変容に関する主要理論を概観し、従来の枠組みでは未来志向の意味生成がどのように位置づけられてきたか、またどこに課題が残されているかを整理する。第3章では、この整理を踏まえて、未来の状況を〈探索・構成・検討〉する過程が循環的に連なり、他者と協働的に意味を深めながら行動準備としての心的基盤を精緻化させていく枠組みとして、「熟慮的ナラティブ生成モデル」を提示する。第4章では、大学生を対象とした減災行動の教育的実践を例に、熟慮的ナラティブ生成がどのように行動準備の形成に寄与し得るかを示す。第5章では、4章で示した実践から得られた知見を踏まえ、本研究の理論的・実践的含意を整理し、今後の展望を述べる。

第2章 理論的背景—未来志向の意味生成と行動準備

人が望ましい行動を実行するためには、未来の状況をどのように理解し、そこに自分をどのように位置づけるかという「意味生成」が重要となると考えられる。しかし、従来の行動科学の主要モデルでは、それぞれ異なる観点から行動を説明してきたものの、未来の出来事をどのように構造化し、因果関係、価値、感情、身体性を統合するかという意味での“意味生成過程”について、正面から取り上げ、十分に扱ってきたとは言えない。本章では、行動変容研究の代表的な理論枠組みを(1)認知要因モデル、(2)プロセスモデル、(3)説得研究、(4)メンタル・シミュレーション研究の四つに整理し、それぞれが未

来の意味生成に関して、どのように扱ってきたかを検討する。あわせて、物語的思考や意味生成研究、文化心理学の知見を参照し、意味生成は本来、個人内に閉じず、社会的・文化的資源に依存し、他者との協働を通じて深まる過程であるという視点を導入する。これらの整理を通じて、既存の枠組みでは十分に説明されてこなかった「未来志向の意味生成」の位置づけが明確となり、次章で提示する 熟慮的ナラティブ生成モデル の必要性和独自性が浮かびあがる。

2.1 行動変容研究における主要な枠組みとその限界

行動変容研究はこれまで、主に下記の四つの系統で発展してきたと考えられる。第一に、健康信念モデル (Health Belief Model) (Rosenstock, 1974; Rosenstock et al., 1988) や計画的行動理論 (Ajzen, 1991) などの認知要因モデルは、脅威認知・利益／障壁・態度などの信念が行動を予測することを示した。しかし、その信念がどのような意味生成の過程を経て形成されるかについては扱われていない。第二に、ルビコンモデル (Rubicon Model) (Heckhausen & Gollwitzer, 1987; Gollwitzer, 1990) は行動の段階を整理し、実行意図 (Gollwitzer, 1999) の効果を示したが、意図形成以前にどのように未来の状況が構造化されるかという意味生成の観点は中心ではない。第三に、物語説得 (Green & Brock, 2000) や自己説得 (Aronson, 1999) は、外的物語の受容や理由生成の効果を示したが、未来の出来事を自ら構成し推敲する能動的・協働的な意味生成過程は扱わない。第四に、メンタル・シミュレーション研究 (Taylor et al., 1998; Pham & Taylor, 1999) は手順・結果の想像が行動を促進することを明らかにしたが、想像の質がどのように形成され、どのように偏るか、さらに他者からの視点がその質をどう変えるかは十分に検討していない。

以上の先行研究を整理すると、既存理論の多くは、個人が「どの信念をもつか」「どの段階に位置するか」「どの物語を受容したか」「何を想像したか」といった静的な状態や結果に焦点を当ててきた。自己説得は能動的な生成を含む点でより動的であるものの、その過程は個人内の構成に限定されている。しかし、未来の出来事をどのように構造化し、因果・価値・感情・身体性を統合し、協働的検討によってそれらを深めていくかという「動的な意味生成プロセス」は中心的に扱っていないと考えられる。本研究はこれらに焦点を当てる点に独自性を持ち、未来の行動を支える協働的意味生成のプロセスを「熟慮的ナラティブ生成」として理論化することを目指す。詳細は第3章で述べる。

2.2 物語的思考とナラティブ生成：人はどのように意味を構成するか

人は出来事を断片的に受け取るのではなく、原因と結果や価値、感情を結びつけて意味のまとまりとして再構成する。この心的過程は「物語的思考 (narrative thinking)」と呼ばれ、人間の経験理解に広くみられる認知形式とされている (Bruner, 1990)。物語的理解は主に過去経験を対象に論じられてきたが、断片的な情報を因果的・価値的枠組みへと再構成するという特徴は未来の出来事をどのように見通すかにも影響すると考えられる。すなわち、人は未来の状況を理解する際にも「もっともらしい物語 (plausible story)」を構築し、その物語に基づいて行動の必要性や妥当性を判断しうる。

もっとも、物語的理解は必ずしも精緻ではない。人は限られた手がかりから即座に意味づけを行い、

一貫した因果連鎖を推測しやすい (Tversky & Kahneman, 1974). この物語化は迅速な理解を可能にする一方で、過度の単純化や因果関係の誤認を招きやすいことも指摘されている (Kahneman, 2011). 例えば防災行動研究では、異常事態の兆候があっても「自分は大丈夫だ」と判断して避難が遅れる現象が報告されており、これは“正常性バイアス (normalcy bias)”として論じられてきた (Omer & Alon, 1994, Kinatender et al., 2015). この現象は、人が異常事態を既存の通常の文脈に同化させ「いつも通りの未来」という単純な物語を維持しようとする傾向を示している。

さらに、Mileti & Sorensen (1990) は、危険の内容、対象地域、推奨行動、行動可能な時間幅、情報源といった情報要素が揃わなければ、避難行動は効果的に喚起されにくいことを示している。彼らの議論は、避難を促すための情報要件に焦点を当てたものである。一方で、本研究の観点からすれば、情報が十分に与えられたとしても、受け手がそれを「自分にとって何が起こり得るのか」「どの行動が妥当なのか」という因果的・価値的枠組みとして再構成しなければ、行動には至りにくいと考えられる。すなわち、情報は行動の必要条件ではあるが十分条件ではなく、受け手側でのナラティブ化（意味の構造化）を経て初めて行動準備が生起すると考えられる。

ナラティブ研究では、このような意味の構成プロセスを「ナラティブ生成 (narrative generation)」として捉える (Polkinghorne, 1988). 未来の出来事に関する見通しや理解は、外部から与えられた情報の受動的かつ自動的な解釈だけではなく「何が起こり得るか」を自ら構成し、その妥当性を吟味する主体な生成的活動によっても促進されると考えられる。したがって、行動準備を高めるには構成されたナラティブを意識化し、必要に応じて点検・再構成する熟慮のプロセスが有用である。

以上から、物語的思考やナラティブ生成は未来の出来事を構造化し、自身との関係を意味づけるうえで重要な役割を果たすことが推察される。他方で、その構成は直観的で感情や既有信念の影響を受けやすく、必ずしも精緻とは限らない。したがって、未来の行動に関する理解がどのように形成・調整されるのかを検討するためには、物語的思考がどのような条件で再構成されうるのかを明らかにする必要があると考えられる。

2.3 メンタル・シミュレーションと未来理解の意味生成

未来の出来事をどのように理解し、その行動的含意をどのように判断するかは、人がその状況を「心の中でいかに構成するか」に大きく依存する。こうした未来の状況の想像的構成はメンタル・シミュレーション (mental simulation) と呼ばれ、行動手順を思い描くプロセス想像 (process simulation) と、結果を思い描く結果想像 (outcome simulation) に大別される (Taylor et al., 1998). 先行研究は、行動のプロセスを具体的に想像することが、行動方略の明確化や自己効力感を高め、望ましい行動の実行を促進することを示している (Pham & Taylor, 1999).

メンタル・シミュレーションは、単なる思考操作ではなく、認知・情動・身体性が統合された多層的な表象過程として理解される。基盤化された認知 (grounded cognition) の研究では、人が未来の行動を想像する際に、身体運動や空間的感覚が模倣的に再現され、こうした身体的表象が実行可能性判断に影響を与えることが示されている (Barsalou, 2008). また、感情経験は身体反応と密接に結びつくため

(Niedenthal, 2007), 未来の出来事を想像する際に生じる身体感覚の質は、行動準備におけるリアリティや切迫感を支える重要な要素となると考えられる。しかし、メンタル・シミュレーションが常に適切な未来理解を導くわけではない。未来の出来事の想像は、既存のスキーマや経験に依存して構成されるため、インパクト・バイアス (impact bias) や焦点化 (focalism) の影響を受けやすく (Wilson & Gilbert, 2003), 楽観バイアス (optimism bias) や希望的観測 (wishful thinking) によって現実的な障害が過小評価される場合もある。これらの偏りは、未来の出来事に関する理解をゆがめ、行動準備の質を低下させる可能性がある。このように、未来理解は受動的に与えられるものではなく、認知・感情・身体性が統合されたシミュレーションを通じて能動的に構成される。他方で、その構成がしばしば偏ることを考えると、どのような条件で未来イメージが精緻化され、現実 に即した理解へと調整されるのかを検討する必要がある。

国内でも、未来状況のイメージ生成を扱った防災研究がみられる。中谷内・尾崎 (2016) は、被災者支援場面を想像させるイメージ課題を用いたが、防災行動の変容効果は認められなかった。この結果は、提示された場面が「他者支援」の文脈であったため、実践者自身が災害時にどのように行動するかという主体的構成が十分に喚起されなかった可能性を示唆している。一方、藤本他 (2017) は、「最悪の結果」から原因を段階的に遡らせる結果事象型イメージトレーニングを提案し、因果連鎖の可視化が対策行動の重要性認識を高める可能性を報告した。これらの知見は、未来状況のイメージは「誰を行為主体として」「どのような因果構造で」構成するかによって質が大きく異なることを示している。しかし、いずれの介入も、未来状況を「物語」として統合的に構成し、行為主体としての自己、感情、価値、身体反応、環境要因を多層的に編み上げる過程までは扱っていない。本研究が提案する熟慮的ナラティブ生成は、未来理解をこうした多層的・統合的な構成として捉える点に特徴があり、従来のメンタル・シミュレーション研究や未来イメージ介入研究が十分に理論化してこなかった側面を位置づけ直す枠組みである。

2.4 批判的検討 (critical examination) と未来理解の調整

前節までに述べたように、物語的思考やメンタル・シミュレーションは、未来の出来事をどのように理解し、その意味をどのように構成するかを方向づける重要な心理過程である。他方で、これらの心的構成物は、直観的判断、既有信念、感情反応に影響されやすく、必ずしも精緻で現実 に即したものとは限らない。この点で重要となるのが、思考内容の妥当性や根拠を点検し、必要に応じて修正する「批判的検討 (critical examination)」の過程である。批判的思考研究では、批判的検討は一般に、推論の根拠の評価、判断バイアスの抑制、反証可能性の検討、多視点からの検討などが強調され、複数の下位過程から構成されるとされる (楠見, 2015; Stanovich & West, 2000; Kahneman, 2011)。これらの過程は、推論を自動的に受け入れてしまう傾向に対して意識的、制御的な働きを及ぼし、思考の質を向上させる機能を担う。また、批判的検討には、思考過程を客観視するメタ認知的側面が含まれ、自身の価値観や願望が推論に及ぼす影響を意識化することにも寄与する。批判的検討が未来理解においてとりわけ重要なのは、未来の出来事に関する思考が既存のスキーマや信念に基づいて構成されやすく、過度の単純化や希望的観測が入り込みやすい点にある。未来に対する想像がこれらの影響を受けると、リスクの過小

評価や行動の先送りといった判断につながる可能性があるため、思考内容を点検し、代替的な解釈や反証的証拠を検討することが求められる。批判的検討は、こうした偏りや誤りを自覚し、未来理解をより現実的で多面的なものへと調整する手がかりを提供する。さらに、批判的検討は、他者との対話や社会的相互作用のなかで促進されることも指摘されている。たとえば Guiller et al. (2008) は、ピアとの議論が主張の吟味・反論生成・代替視点の比較を促し、批判的思考の深化につながることを明らかにしている。他者の視点、異なる文化的前提が提示されることで、自身が前提としていた因果モデルや価値観が相対化され、新たな意味づけの可能性が開かれる。このような「協働的検討」は、個人内の思考にとどまらず、社会的文脈における意味生成の過程とも関連する。

2.5 小括

本章では、未来の出来事に対する理解や行動に関する判断が、どのような心理過程を通じて形成されるのかを、既存研究に基づいて検討した。まず、人は断片的な情報を、原因—結果、価値、感情と結びつけて再構成する「物語的思考」を通して経験を意味づけること、そしてこの物語的枠組みは過去経験のみならず、未来の出来事をどのように見通し、その必要性をどのように理解するかにも影響を及ぼす可能性があることを確認した。

次に、未来の出来事に対する理解は、認知的・情動的・身体的な表象が統合されたメンタル・シミュレーションを通して能動的に構成されることを確認した。しかし、こうした未来理解は、既存のスキーマや感情的反応に依存しやすく、楽観バイアスや焦点化など、さまざまな偏りが入り込むことも明らかにした。さらに、これらの心的構成物が偏りを含むことを踏まえると、思考内容の妥当性を点検し、必要に応じて修正する「批判的検討」が不可欠であることを論じた。批判的検討は、判断の根拠を評価し、代替案を検討し、バイアスを抑制する認知的過程であり、未来の出来事に対する理解をより現実的で多面的なものへと調整するための基盤となると考えられる。

以上を総合すると、未来の行動に関する理解は、情報の受動的な受容によって形成されるのではなく、物語的思考、メンタル・シミュレーション、批判的検討といった複数の過程を通じて動的に構成される過程であることがわかる。また、その構成は自動的で直観的な性質をもちながらも、適切な条件が整えば調整・再構成されうる点が示唆される。

第3章 熟慮的ナラティブ生成モデル

本章では、未来理解を〈探索—構成—検討〉という心理過程の循環として捉える枠組みを提示する。なお、本章で示すモデルは、行動の生起を直接説明する完成理論ではなく、未来理解がどのような心的過程を経て精緻化されうるかを整理するための理論的枠組みである。以降では、まずモデルの全体構造を示し（3.1節）、続いて各過程の心理学的特徴と先行研究との関連を検討する（3.2～3.4節）。最後に、これら三過程がどのように未来理解の精緻化に寄与するのかをまとめる（3.5節）。

3.1 モデルの全体構造

図1に示すように、本モデルは、未来理解を〈探索—構成—検討〉という三つの心理過程が循環的に働くことによって調整される、可塑的かつ生成的な意味生成プロセスとして捉えるものである。出発点となるのは、支配的個人ナラティブ（Dominant Personal Narrative: DPN）である。DPNとは、個人が“特定の未来状況において自分はどのように振る舞い得るのか”という行為主体性に関する中心的な物語的前提であり、過去経験・自己信念・文化的ナラティブが統合された意味枠組みである。DPNは、明示的であれ暗黙的であれ、未来の出来事理解に先立って存在し、探索段階でどの手がかりに注意を向けるか、構成段階でどの因果線を強調するかといった未来理解の方向性を初期段階から規定する。なお、初期DPNは必ずしも明確な物語として成立しているとは限らず、未形成であったり脆弱であったり、あるいは断片的なイメージにすぎない場合もある。ただし、その曖昧さを含めて、初期の意味枠組みは探索の方向づけや情報の取捨選択に影響を及ぼす点で、未来理解の重要な基盤となる。

探索・構成・検討の三過程は、未来理解を段階的に組み立てる中心的な心理機能として機能する。探索は、未来状況に関する手がかりを収集し、可能性空間を広げる働きを担う。構成は、得られた素材から因果的・情動的・価値的・身体的要素を統合し、未来を“物語として理解する”枠組みを形成する。検討は、構成された未来ナラティブの妥当性や整合性を点検し、偏りや欠落を補う過程である。これら三過程は直線的に進行するのではなく、相互に行き来しながら未来理解を漸進的に調整する循環過程として位置づけられる。

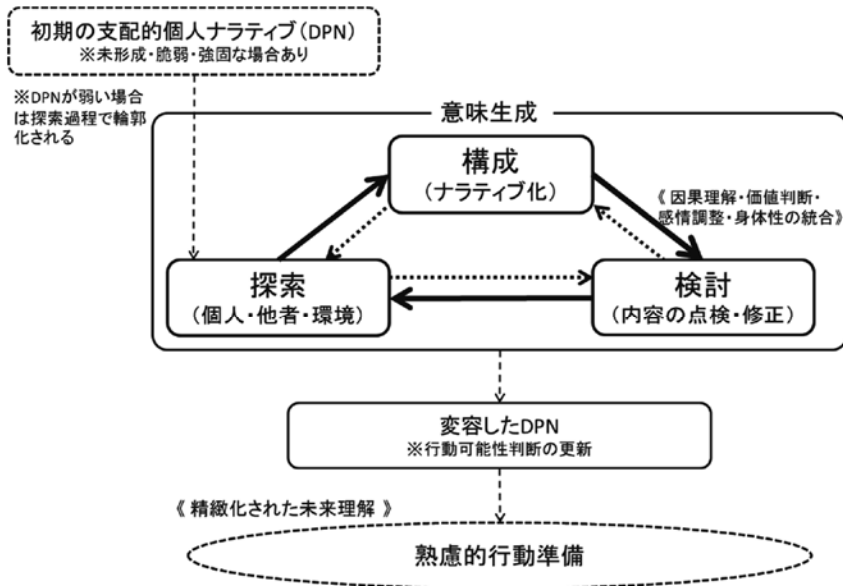
この循環のプロセス全体は「意味生成」という上位の枠組みによって統括される。意味生成とは、個人が経験、知識、価値、感情、身体感覚、文化的背景など多様な手がかりを参照しながら、未来の出来事が自分にとってどのような意味をもつのかを理解し、その解釈を自らの文脈のなかに位置づける総合的な過程である。探索・構成・検討は、この意味生成を支える下位の心理機能として機能し、それぞれが独立しつつも、全体として統合的に未来理解を組み立てる。

検討段階では、他者視点の導入や反証生成を通じて、DPNの偏りが可視化され、相対化・修正が生じる。こうした再構成の結果として形成される「変容したDPN」は、状況の理解と行動可能性判断を方向づける“心理的基盤”として、熟慮的行動準備を支える要素となる。本研究では、このDPNの変化を、未来理解の調整プロセスにおける重要な指標として扱う。

最終的に、これらの過程を通じて更新されたDPNは、熟慮的行動準備を方向づける。熟慮的行動準備とは、未来状況の現実的把握、行動の意味・価値・感情の含意の統合、生起し得る困難の理解、および自身の行動可能性の評価を含む心理的準備状態であり、行動直前の意思決定そのものではなく、その前提となる「意味の構え」を示す概念である。

本モデルは、未来理解を自動的に形成されるものではなく、生成的で可塑的な心理過程によって精緻化されていくプロセスとして捉える点に理論的独自性を有する。

図1 熟慮的ナラティブ生成モデル



3.2 探索 (exploration) —— 未来状況に関する情報の収集と可能性空間の拡張

探索は、未来の状況に関する初期的な手掛かりを収集し、未来理解の可能性空間を広げる過程である。未来の出来事は直接観察できないため、人は過去経験、他者の語り、映像・写真、社会的言説、文化的物語構造など多様な情報源から素材を集め、その断片を基に状況の輪郭を推定する。この探究的過程は、後続の構成の基盤を形成する点で、未来理解における重要な出発点となる。

ただし、探索は中立的な情報収集ではなく、初期 DPN によって方向づけられる。人は自らの価値観や感情状態、自己像に整合する手掛かりを選択的に取り込みやすく、その結果、探索段階での偏りが未来理解の方向性を早い段階で固定化してしまう可能性がある。探索には、自動的・受動的に素材を取り込む側面（自然発生的探索）と、複数の視点や情報源を意識的に取り入れる側面（能動的探索）が併存する。熟慮的ナラティブ生成が目指すのは、後者の能動的探索を促進することで、未来理解の偏りを抑制し、多面的で柔軟な状況把握を可能にすることである。

探索の偏りは、認知バイアスや個人差だけでなく、情報リテラシー、情報環境の構造、可視性の高い素材の偏在といった外的要因にも影響される。また、悲観的な自己像をもつ学習者が「自分は行動できない未来」を支持する素材だけを選択的に収集するなど、初期 DPN と探索の偏りが相互に強化されることもある。したがって、探索は未来理解に不可欠な基盤である一方、偏りを内包しやすい脆弱な過程でもある。

本モデルでは、探索を固定化された過程ではなく、検討との往還を通じて拡張される可塑的過程として捉える。検討によって欠落が発見された場合には、再探索によって新たな視点や手掛かりが取り込まれ、未来理解が段階的に修正されていく。すなわち、探索は検討と循環的に連動しながら、未来理解を

動的に精緻化していく基盤的過程である。

3.3 構成 (organization) : 未来の状況を因果的・価値的枠組みへと構造化する過程

探索によって得られる素材は断片的であり、そのままでは未来理解を支える基盤として不十分である。構成とは、これらの断片の手掛かりを因果的・意味的枠組みへと再編成し、未来の出来事を一つの物語として理解する過程である。この過程では、出来事の因果連鎖、登場人物の役割関係、感情的反応、価値判断、身体的・感覚的表象が統合される。その結果、未来の出来事がどのように進展し、どのような意味をもつかが構造化される。物語的思考研究が示すように、人間は経験を理解する際に物語形式を自然に用いる (Bruner, 1990)。未来の状況を想像する際にも〈状況—葛藤—結果〉という構造が容易に立ち上がり、その因果線に自己がどのように関わるのかが物語として組み立てられる。また、感情は出来事の意味づけを方向づけ、価値は何を重要とみなすかを規定する。さらに、匂い、揺れ、湿度、空気の重さといった身体的イメージは未来状況のリアリティを高め、行動の必要性を自分事として把握することに寄与する。

一方で、構成は偏りを含みやすい過程でもある。人は複雑な状況を単純化したり、楽観的な予測に偏ったり、望ましい結論に整合する物語を選択的に形成しやすい。これらの偏りは初期 DPN によって強化されることがあり、探索段階で取り込まれた偏った素材が構成過程でさらに増幅される可能性がある。そのため、構成過程を可視化し、構成されたナラティブの前提や因果関係を検討可能な形で外化することが重要である。外化とは、構成されたナラティブを検討可能な形に明示化することであり、文章化、図示化、映像化、マンガ化、対話による語りなど多様な形式を含む。外化によってナラティブの前提や因果関係が可視化され、偏りや欠落を点検しやすくなる。これにより、構成された未来理解は他者との協働的検討を通じて修正・再構成され、より妥当で厚みのある未来理解へと導かれる。

3.4 検討 (examination) : 構成された未来ナラティブの点検と再構成に向けた調整

検討は、構成された未来ナラティブの妥当性・整合性・現実性を意図的に点検し、必要に応じて再構成する熟慮的過程である。初期的ナラティブは感情反応や既有信念、文化的背景の影響を受けやすく、過度の単純化や希望的観測を含むことが少なくない。検討過程は、こうした偏りを可視化し、修正する役割を担う。

この過程には、メタ認知的モニタリング、反事実的思考、反対証拠の検討、他者視点の導入といった複数の心理機能が関与する。とくに他者視点の導入は、自分の理解を相対化し、状況解釈の幅を広げる点で重要である。しかし、検討が形式的に行われると、自説を補強する都合の良い反事実が生成されたり、多視点が既存の枠組みに吸収されたりする可能性がある。そのため、検討を支える枠組みや点検観点、視点切替のガイドライン (例：因果関係の妥当性を確認するチェックリストや、他者視点を導入する質問プロンプト) が重要となる。

検討過程は、単なる誤りの修正ではなく、DPN そのものの再解釈 (reframing) を可能にする。すなわち、「自分は行動できない」という前提や「状況は単純である」という前提が再構成され、変容した

DPNとして統合される。これが熟慮的行動準備の基盤となる。検討過程は、外化されたナラティブを他者と共有し、チェックリストなどを用いて批判的に点検することで促進される。具体的な方法については第4章で示す。

3.5 未来理解の精緻化——探索・構成・検討の循環的統合

未来理解は、探索・構成・検討の三過程が循環的に相互作用することで段階的に精緻化される。探索は素材の収集を担う。構成はその素材を因果的・意味的枠組みへと統合する。検討は構成された理解を点検し、必要に応じて再探索や再構成を促す。この反復的過程により、未来理解は多面的かつ現実的なものへと変化し、生起し得るリスクの見積もり、困難の把握、自身の行動可能性の理解が深化する。

この循環は、初期DPNを固定された前提として扱うのではなく、可塑的な意味枠組みとして再構築していくうえで不可欠である。変容したDPNは、熟慮的行動準備を方向づける新たな内的枠組みとなり、行動の意味を支える重要な基盤を形成する。ただし、この循環は自然に起動するわけではない。素材の不足、構成の困難さ、多視点導入の負荷などによって停滞する可能性がある。そのため、探索を広げる資料、構成を助けるプロット図やストーリーカード、検討を促すチェックリストや他者フィードバックといった教育的支援が重要となる。これらの支援は、外化と協働的検討を促進し、未来理解の循環を持続的に駆動する役割を果たす。

以上を総合すると、熟慮的ナラティブ生成モデルの独自性は、未来理解を自動的な産物ではなく、探索・構成・検討の循環的統合を通じて精緻化される可塑的過程として捉え、その過程を教育的に支援する点にある。具体的な教育的実践方法については、第4章で検討する。

第4章 熟慮的ナラティブ生成の教育的実装

本章では、第3章で示した熟慮的ナラティブ生成モデルを、鉄道異常時を題材とした授業実践に適用し、学習者の未来理解がどのように生成・修正されるのかを探索的に検討する。

4.1 教育実践の概要

本実践は、学生が鉄道異常時の未来状況を自ら物語として構成し、他者との協働的な推敲（モデルにおける「検討」に相当）を通じて未来理解を吟味する過程を可視化することを目的とした。とくに、目標行動がとれるハッピーエンドと、目標行動がとれないバッドエンドという二種類の結末を創出させる構成や、相互に物語を読み合う検討過程は、初期DPNに拘束されない思考の拡張と未来理解の精緻化を促すことを意図したものである。

本実践の対象はA大学3年生12名（男性1名、女性11名）であり、授業設計およびファシリテーションは筆者が担当した。授業は、熟慮的ナラティブ生成の三つの段階（探索・構成・検討）に沿って三段階で構成した。

(1) 第1段階（探索）

大学沿線のB鉄道会社の社員が、車内緊急時の対処行動や乗客同士の協力行動（これらを目標行動とした）について講義を行い、非常通報装置やドアコックなどの車内機器の使い方も解説した。講義後、学生は自分を主人公とし、結末の異なる二種類の物語（ハッピーエンド／バッドエンド）を800字程度で創作する課題に取り組んだ。その準備として、学生は事例や公式資料、再現映像などを自ら探索した。筆者からも資料の探し方の指導や参考情報の提供を行った。

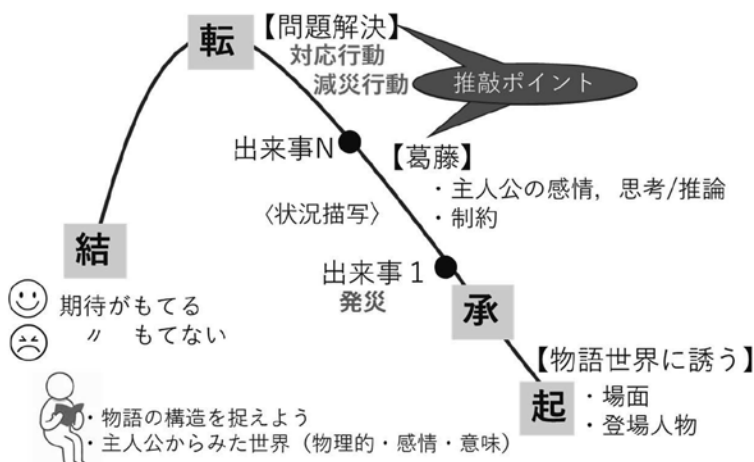
(2) 第2段階（構成）

学生は探索した情報をもとに、同一の未来状況について目標行動が成功した場合（ハッピーエンド）と失敗した場合（バッドエンド）の二種類の物語を創作した。この構成は、初期DPNに拘束されず、異なる行為主体性や反事実的展開を扱うことを可能にする「思考実験の場」として機能することが意図された。物語は、空間的制約、乗客との相互作用、恐怖・逡巡などの心理反応、価値判断、行動の理由と結果の因果的記述を含む構成とした。

(3) 第3段階（検討）

学生は三人一組となり、互いの物語を読み合い推敲を行った。この過程では、物語を因果的に点検するために、プロット図（図2）と因果チェックリストの二つのツールを用いた。プロット図は「発災前—発災時—対応行動（成功／失敗）—結果」の連鎖を可視化するために使用した。因果チェックリストでは、目標行動に影響する物理的・社会的・心理的要因を整理し、記述された要因と抜け落ちた要因を比較することで因果理解の精緻化を促した。物理的側面には「煙・暗さ・狭さ・揺れ」などの環境条件、社会的側面には「周囲の乗客の反応・協力の困難さ」などの対人状況、心理的側面には「恐怖・逡巡・過小評価」などの内的反応が含まれる。特に、初期DPNと異なる結末を描く物語では因果構造が単線的になりやすかったが、チェックリストにより複線的で現実的な未来理解への再構成が進んだ。

図2 推敲場面で用いられたプロット図



筆者（教員）は特定の「正しい行動」を教授する立場ではなく、学生の探索と再構成を支えるファシリテーターとして関与した。推敲場面では、多様な視点が尊重される対話環境の整備に努め、内容の正誤判断は避けた。ただし、実際の鉄道の現場管理の観点から明らかな誤りがあった場合には必要に応じて指摘した。また、物語創作前（T1）、創作後（T2）、推敲後（T3）の3時点でネガティブDPNとポジティブDPNを測定し、創作後と推敲後には自由記述も収集した。なお、ネガティブDPNとは、「自分にはできることはない」「係員に任せるべきである」、ポジティブDPNは「自分の行動が減災に寄与する」「自分にも果たせる役割がある」とした。それぞれについて6段階評定（1：全くあてはまらない～6：かなりあてはまる）で回答を求めた。

4.2 主な結果

本実践では、量的指標（DPN得点の推移）、物語の構造的変化、自由記述の内容の3点から、熟慮的ナラティブ生成の過程に生じた変化を検討した。

（1）DPN得点の変化（量的）

図3に示すように、ネガティブDPNは創作前・創作後・推敲後の順に段階的に低下した。分散分析の結果、時期の主効果は有意であり（ $F(2,22)=169.29$, $p<.001$, $\eta_p^2=.94$ ）、Bonferroni法による多重比較では3時点すべての組み合わせに有意差が認められた。図4に示すポジティブDPNは、創作前から推敲後にかけて上昇した。分散分析の結果、時期の主効果が有意であり（ $F(2,22)=12.86$, $p<.001$, $\eta_p^2=.54$ ）、多重比較（Bonferroni法）の結果、創作前と推敲後の間に有意差がみられた（5%水準）。

これらの結果は、物語創作と推敲という一連の作業を通じて、〈自分にはできない〉とするネガティブなDPNが弱まり、〈自分にも果たせる役割がある〉というポジティブなDPNが強まったことを示す。すなわち、未来を物語として構成し、他者の視点を交えて再検討する過程が、行動可能性に関する自己像（未来の自己ナラティブ）に変化をもたらしたことが量的にも確認された。

図3 ネガティブDPN（係員に任せるべき／自分にはできることはない）

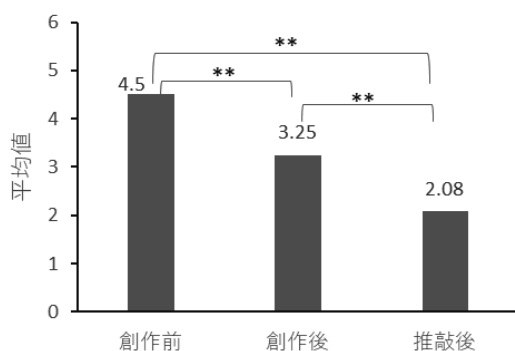
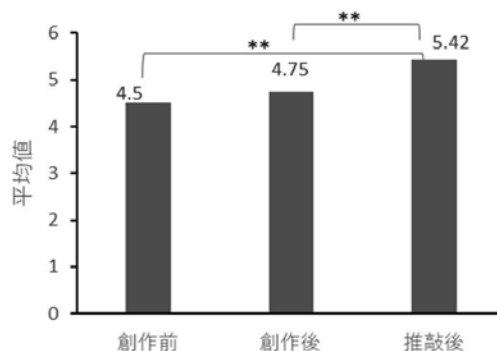


図4 ポジティブDPN（自分の行動が減災に有効）



(2) 物語の構造的変化 (質的)

学生が創作した未来状況は、地震 (4 名)、車両火災 (2 名)、車内不審者 (5 名)、急病人 (1 名) であった。目標行動として記述された対処行動は、非常通報装置の使用、消火器や非常用ドアコックの活用、貫通扉による車両移動などであった。初稿の分量は概ね 800 字であった。

物語は「発災前—発災時—対応行動 (成功／失敗)—結果」という構造を備えていたが、初稿ではその構造に偏りがみられた。とくに、初期 DPN とは逆の結末 (例：本来は〈できない〉と考えている学生が成功した結末を描く場合) では、

- ・ 結果の描写が極端に短い
- ・ 発災前の状況記述が不足する
- ・ 成功・失敗につながる因果連鎖が単線的である
- ・ 恐怖・逡巡などの内的反応や、空間的・社会的条件の描写が限定的

といった特徴がみられた。

推敲過程では、これらの点が相互に指摘され、全員が文章構成・因果連鎖の記述を修正した。二つの結末の対比を明確にするため、主人公の感情、周囲の反応、環境条件などが追加記述され、因果構造はより複線的で現実的なものへと精緻化された。テーマの変更はみられなかったが、推敲により物語全体の情報量と因果密度が高まり、未来状況に対する理解が厚みを増した。

(3) 学習者の自由記述 (主観的)

物語創作後の自由記述は、①執筆の難しさと楽しさ、②ストーリー構築の工夫、③キャラクターの描写、④防災教育としての意義、⑤緊急時対応の再認識、の 5 つに分類できた。多くの学生が創作の難しさを述べた一方で、7 名が「物語を創る楽しさ」に言及した。また、「読者に疑似体験を提供できる」「主人公を自由に動かす実験のようだった」といった記述から、物語創作が未来行動のシミュレーションとして機能していたことが推察される。

推敲後の自由記述は、①文章構成の改善、②分量調整、③二つの結末の対比の明確化、④非常用装置の描写の精緻化、⑤言葉の精度向上、⑥第三者視点の活用、の 6 つに整理された。また、「他者の物語を読むことで緊急時のイメージが明確になった」「自分の考えが少数派かもしれないと感じた」など、他者の視点を受けることで自身の前提が相対化されたことを示す記述も多くみられた。

さらに、ハッピーエンドにもかかわらず「主人公以外の頼れる他者 (多くは男性) が問題を解決する」という展開を採用した例もあった。当該学生は「自分には適切な対応ができず、その不足を補うために他者を動員した」と述べており、初期 DPN にみられる〈自分にはできない〉という自己効力感の低さが物語構成に影響した可能性が示唆される。この点は、初期の心的ナラティブが創作方略として表出する様相を捉える重要な所見であると考えられる。

本実践では、推敲後も物語の主題や大枠の因果構造は大きく変化していなかったが、他者との相互作用を経て、その背後にある初期の DPN が相対化・再構成される過程が観察された。具体的には、「自分が想定した状況では対応は難しいと思ったが、他の学生の物語に描かれた状況なら、自分にもできるかもしれないと感じた」というように、行動可能性を広く見積もる方向の変化が確認された。一方で、

「他の人と話しているうちに、やはり自分には対応できないだろうという思いを強めた」という、行動可能性をより低く見積もる方向の変化もみられた。これらの所見は、出来事そのものの構造よりも、その状況をどう意味づけ、自分をどのような行為主体として想定するか、という前提的自己イメージの変化こそが行動準備の質を左右しうことを示している。すなわち、ナラティブの表層（物語内容）が大きく変わらなくても、相互作用の過程で自己像や前提が更新される点に、熟慮的ナラティブ生成の中核的意義がある。

さらに、こうした調整は、対話を通じて意味をすり合わせる過程として、Kashima (2000, 2021) が指摘する grounding（相互行為における共同的意味構成）として理解できる。他者の物語や視点に触れることで、自己の前提が照射され、現実的な行動可能性に関する判断が再配置されるという点は、熟慮的ナラティブ生成が「個人の内的プロセス」に閉じたものではなく、社会的・対話的な熟慮に根ざすことを示す重要な所見といえる。

4.3 考察

本実践の結果は、第4章前半で示した〈探索—構成—検討〉の三段階を備えた教育実践が、未来理解と行動準備に質的变化をもたらす可能性を示している。本節では、DPNの変化、物語の再構成、学習者の気づきという三つの観点から、本実践の意義と理論的含意を考察する。

(1) DPN 変化の社会的メカニズム

ネガティブ DPN の低下とポジティブ DPN の上昇という量的変化は、単に個人内の態度変化を意味するだけではなく、推敲（＝モデルの〈検討〉）過程における社会的比較・相対化がその主要な契機になった可能性が高い。特に、初期 DPN が強かった学生の物語には、「自分にはできることはない」「行動主体は自分以外のより強い他者である」という前提が明確に表れていた。これは、自己効力感の低さや行為主体性の希薄さが、未来状況の想像にも影響することを示している。加えて、一部の学生がハッピーエンドを構成する際、「自分ではなく頼りになる他者（多くは男性）が状況を解決する」というプロットを採用した点は注目される。自由記述によれば、これは「自分には適切な対処ができない」という初期ナラティブが強く、ポジティブな結末を描くための苦肉の策として選択されたものであった。この所見は、初期の心的ナラティブが創作方略に直接影響し、可視化されることを示している。

また、推敲（＝モデルの〈検討〉）場面で学生同士が物語を読み合う中で、自分の理解が少数派である可能性に気づき、判断枠組みの再評価が促されたケースもみられた。こうした社会的な気づきは、DPN の更新と行動可能性の再構築に寄与したと考えられる。これは、熟慮的ナラティブ生成が、個人内の省察だけでなく協働的な吟味による偏り修正を含む点で、従来の個人ベースのメンタルシミュレーション研究とは質的に異なる特徴をもつといえる。

さらに、本実践では、他者の物語に触れることで「自分にもできるかもしれない」という上方修正と、「やはり自分には難しい」という下方修正の双方が生じていた。これは、Kashima (2014) のいう grounding（共同的意味構成）の観点から、DPN が社会的相互作用を通じて動的に再構成されることを示す重要な所見である。

(2) 物語の再構成と因果理解の深度化

推敲前の初稿の物語では、原因と結果の連鎖が単線的であったり、発災前の状況や周囲の反応、感情や身体反応が十分に描写されないなど、未来状況の因果モデルが限定的に構成されていた。しかし、プロット図や因果チェックリストを用いた検討過程では、学生は「どの要因が行動を阻害したか」「どの場面で判断が必要か」「どのような対処が合理的か」を多面的に再検討し、その内容を物語に反映していた。推敲過程で生じた意味の更新は、意味が個人内過程に閉じず、他者との社会的相互作用を通じて構築されるという文化心理学の知見（e.g., Kashima, 2014）とも整合する。他者からのコメントや視点取得を通じて、自らの因果モデルの偏りに気づき、それを再構成する過程は、社会的意味生成の枠組みの中で未来理解が深まるプロセスとして理解できる。

特に、他者の物語に描かれた成功・失敗の因果構造に触れることは、自らの行動可能性モデルの再配置を促し、DPNの更新と密接に結びついていた。物語が大きく変化しなくても、背後の「自己がどのような行為主体であるか」という前提が調整される点は、熟慮的ナラティブ生成の重要な機能である。

このとき重要であったのが、「成功／失敗の対比」という構造的フレーミングである。二つの結末を比較しながら因果構造を編み直すことで、学生は「同じ状況でも判断と行動の違いが結果を大きく左右する」という現実的な見通しを獲得していた。これは、熟慮的ナラティブ生成モデルにおける〈構成—検討〉の循環が、因果理解を深める認知的ブースト（cognitive boost）として機能したことを示唆している。

(3) 物語創作を通じた「自分ごと化」と行為主体性の立ち上がり

自由記述にみられた「主人公を舞台上で自由に動かす実験のようだった」「想像しているうちに悲しくなった」といった言及は、物語創作が未来状況の「自分ごと化」を促進したことを示している。物語構成の過程では、学生は自分自身を主人公として未来状況に配置し、他者との関係性、身体感覚、価値葛藤などを統合的に想像していた。このプロセスは、単なる知識想起ではなく、行為主体としての自分を想像的に立ち上げる操作を伴う。こうした「自分ごと化」も、他者との相互作用の中で自らの前提が照射されることで強化されており、熟慮的ナラティブ生成が本質的に社会的プロセスであることを示唆している。

さらに、推敲過程における相互作用は、自分の想像や判断を俯瞰し、他者の視点から検討する契機となった。他者の物語を読むことによる擬似的な「分散認知（distributed cognition）」的経験は、自己の前提の相対化を促し、行動準備の質的变化に寄与した可能性がある。こうした点から、本実践は熟慮的ナラティブ生成が意味生成（sense-making）と行動準備（action readiness）を媒介する心理的基盤として機能することを示唆している。熟慮的ナラティブ生成における未来理解とは、行動準備そのものではないが、行動準備が成立するための心理的前提構造である。

第5章 総合考察——熟慮的ナラティブ生成モデルの意義と今後の課題

5.1 本研究の位置づけと目的の整理

本研究の目的は、「望ましい行動（目標行動）を知っていても実行に移せない」というギャップに対して、その背景にある未来志向の意味生成過程を「熟慮的ナラティブ生成」として理論化し、行動準備を支える心理的基盤を明らかにすることであった。序論で述べたように、従来の行動変容研究は、信念や態度、意図といった静的指標、あるいは行動段階を説明するモデルに依拠してきたが、未来の出来事をどのように物語として構造化し、そこに自分をどのように位置づけるのかという「意味生成」のプロセスは十分に検討されてこなかった。本研究は、このギャップに対して、物語的思考、メンタル・シミュレーション、批判的検討、意味生成研究を統合し、未来理解を〈探索—構成—検討〉という循環的過程として捉える熟慮的ナラティブ生成モデルを提示した。さらに、第4章の鉄道異常時を題材とする教育実践を通して、この枠組みが行動準備の質的变化を説明しうることを示した点に特色がある。

5.2 熟慮的ナラティブ生成モデルの理論的意義

第2章では、認知要因モデル、プロセスモデル、物語説得・自己説得研究、メンタル・シミュレーション研究を整理し、それぞれが行動変容の側面を説明しつつも、「未来志向の意味生成」を動的過程として扱ってこなかったことを指摘した。本研究の理論的独自性は、特に以下の三点にある。

第一に、未来理解を〈探索—構成—検討〉の循環として捉えた点である。人は、過去の経験や社会的言説から素材を探索し、それらを因果的・価値的枠組みへと構成し、さらに批判的検討（モデルにおける〈検討〉）によって偏りや欠落を調整するというプロセスを通じて未来を理解する。本モデルは、この動的な意味生成プロセスを明示的に構造化し、行動準備を支える基盤として位置づけた。

第二に、DPNという概念を導入し、未来理解の出発点としての心的物語を明示化した点である。DPNは、特定の未来状況において「自分は何者でありうるか」を規定する物語的前提であり、探索や構成の方向性を初期段階から制約する。本研究の教育実践では、「自分にはできないことはない」「行動主体はより強い他者である」といったネガティブなDPNが、ハッピーエンド物語の創作方略に反映されていたことが示され、DPNの存在が具体的に可視化された。これは、DPNが単なる態度ではなく、物語生成の様式として現れることを示している。

第三に、意味生成を個人内に閉じず、他者との協働的検討（推敲＝モデルの〈検討〉）によって深められる社会的プロセスとして扱った点である。推敲の場面では、他者の物語を読み合い、相互にコメントする中で、学生は「自分の想像が多数派とは限らない」「他者は異なる因果モデルをもつ」ことに気づき、これまで自明視していた前提が揺さぶられていた。これは、批判的思考研究において指摘されてきた「多面的検討」「判断理由の明示化」「反証可能性の探索」と整合する。また、他者のナラティブを参照する行為は、文化心理学が論じる意味生成の社会的性質（socially distributed sense-making）にも対応する。さらに、本研究で観察されたように、他者との相互作用のなかで「自分にもできるかもしれ

ない」「やはり自分には難しいかもしれない」といった行動可能性の上方修正・下方修正が生じていた点は、支配的個人ナラティブ（DPN）が社会的相互作用を通じて動的に再構成されうることを示している。これは、意味が対話的なやり取りの中で共同的に構築されるとする Kashima（2014）の grounding の議論とも整合的である。

以上より、本研究が示した熟慮的ナラティブ生成の協働的側面は、批判的思考研究と文化心理学的意味生成研究を架橋する理論的貢献を持つと言える。

5.3 行動準備と教育実践への示唆

第4章の教育実践は探索的ではあるが、熟慮的ナラティブ生成モデルが行動準備を支える具体的メカニズムを検討するうえで、いくつかの示唆を与える。

第一に、物語創作は「安全な思考実験の場」として機能しうる点である。学生は、自らを主人公として未来状況を構成し、成功・失敗の二つの結末を比較的自由に扱った。この過程は、身体的・社会的危険のない「仮想的な熟慮の場」として作用し、行動手順のみならず感情、身体反応、他者との相互作用を統合的に扱う契機となった。

第二に、プロット図と因果チェックリストを用いた協働的検討（推敲＝モデルの〈検討〉）は、因果理解の複線化と行動準備のリアリティ向上に寄与した。学生は二つの結末を対比しながら、「どの場面で判断が必要か」「どの要因が行動を阻害したか」を吟味した。これは未来状況の状況モデルを具体的に組み立てる契機となり、結果として DPN の更新にもつながっていた。ここで生じた DPN の更新は、一方向の楽観化ではなく、他者の物語に触れるなかで「自分にもできるかもしれない」「やはり自分には難しいかもしれない」といった行動可能性の見積もりが、上方・下方の両方向に調整されるプロセスとして観察された。

第三に、他者との協働的検討は、行為主体性の立ち上がりと文化的コードの点検に寄与した。ハッピーエンドにもかかわらず「より頼りになる他者（多くは男性）が状況を解決する」物語が生まれたのは、初期 DPN とジェンダー化された期待が構成を左右していたことを示す。他方で、推敲においてこうした前提が他者の視点に晒されることで、相対化が促進された。こうした相互作用は、意味や行動可能性が社会的に共同構成されるという grounding の観点からも理解でき、熟慮的ナラティブ生成が文化的コードの点検と再構成を促す教育的機能をもつ可能性を示している。

5.4 本研究の限界

本研究にはいくつかの限界がある。第一に、対象が A 大学の少人数の学生に限られており、量的結果の一般化には慎重さが必要である。第二に、題材が鉄道異常時に特化しているため、他領域のリスク状況で同様のプロセスが生じるかは明らかではない。第三に、DPN と行動準備の測定指標は本研究の目的に即して作成したものであり、尺度としての妥当性検討は今後の課題である。第四に、推敲過程の相互作用は逐語的・会話分析的に分析されておらず、協働的検討の具体的メカニズムは十分に明示されていない。第五に、本研究で扱った変化は短期的であり、長期的な行動変容につながるかどうかは不明

である。

以上の限界を踏まえると、本研究の知見は探索的であり、モデルの妥当性の累積的検証が今後求められる。

5.5 今後の課題と展望

今後の課題として、以下の三点が挙げられる。第一に、モデルの一般化可能性の検討である。鉄道異常時に限らず、健康行動、オンライン誤情報への対処、偏見抑制など、他領域のリスク状況にモデルを適用し、DPNや行動準備の変化を比較することが求められる。その際、領域固有の文化的ナラティブがDPNにどう組み込まれるかの分析は重要である。

第二に、協働的検討のプロセスを精緻化し、批判的思考研究との接続を強めることである。実際にどのような問いかけ、反論、視点取得が行われているのかを詳細に分析することで、熟慮的ナラティブ生成における〈検討〉の下位過程が明らかになる可能性がある。とくに、他者とのやり取りのなかで意味や行動可能性の見通しがどのように共同構成されているのかを、groundingの観点から検討することは重要である。

第三に、熟慮的ナラティブ生成を長期的な行動変容と結びつける評価枠組みの構築である。DPNの更新が、実際の行動にどのように反映されるかを長期的に追跡する必要がある。

以上のように、本研究は未来志向の意味生成を「熟慮的ナラティブ生成」として位置づけ、行動準備を支える心理的基盤の一端を理論的・実践的に示した。本稿で提示した枠組みは、「知っているのに行動できない」という現象を、単なる意志の弱さや動機づけの不足としてではなく、人がどのように未来物語を構成し、他者との協働的検討を通じて再構成しうるのかという観点から捉え直す手がかりとなる。

注記

- 1) 本研究の理論的検討は科学研究費助成事業（科研費）若手研究（22K13797「ネガティブ感情の表出者に対する対人評価における無意識的偏見とその制御」）の助成を受けた。実践的検討は2025年度成城大学特別研究助成（「被災についての物語の創作は減災行動を促すのか？—心的機序の解明に向けた検討」）の支援を受け実施した。

引用文献

- Ajzen, I. (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50 (2), 179-211.
- Aronson, E. (1999). The power of self-persuasion. *American Psychologist*, 54(11), 875-884.
- Barsalou, L. W. (2008). Grounded cognition. *Annual Review of Psychology*, 59, 617-645.
- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning: Four lectures on mind and culture* (Vol. 3). Harvard university press.
- Edelson, S. M., & Reyna, V. F. (2021). How fuzzy-trace theory predicts development of risky decision making, with novel extensions to culture and reward sensitivity. *Developmental Review*, 62, 100986.
- 藤本 一雄・坂本 尚史・細川 正清・室井 房治・近藤 伸也 (2017). 自然災害による最悪の事態を回避するため

の結果事象型イメージトレーニングの提案と実践 地域安全学会論文集, 30, 61-70.

- Gollwitzer, P. M. (1990). Action phases and mind-sets. In E. T. Higgins & R. M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior* (Vol. 2, pp. 53-92). Guilford Press.
- Gollwitzer, P. M. (1999). Implementation intentions: Strong effects of simple plans. *American Psychologist*, 54(7), 493-503.
- Green, M. C., & Brock, T. C. (2000). The role of transportation in the persuasiveness of public narratives. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79(5), 701-721.
- Guiller, J., Durndell, A., & Ross, A. (2008). Peer interaction and critical thinking: Face-to-face or online discussion? *Learning and Instruction*, 18(2), 187-200.
- Heckhausen, H., & Gollwitzer, P. M. (1987). Thought contents and cognitive functioning in motivational versus volitional states of mind. *Motivation and Emotion*, 11(2), 101-120.
- Kahneman, D. (2011). Fast and slow thinking. *Allen Lane and Penguin Books, New York*.
- Kashima, Y. (2014). Meaning, grounding, and the construction of social reality. *Asian Journal of Social Psychology*, 21(2), 65-75.
- Kinatered, M., Kuligowski, E. D., Reneke, P. A., & Peacock, R. D. (2015). Risk perception in fire evacuation behavior revisited: Definitions, related concepts, and empirical evidence. *Fire Science Reviews*, 4(1), 1.
- Klein, G. (1998). *Sources of power: How people make decisions*. MIT Press.
- 楠見孝. (2015). 心理学と批判的思考 楠見孝・道田泰司 (編)「ワードマップ 批判的思考: 21 世紀市民のためのリテラシーの基盤」 新曜社.
- Lyotard, J.-F. (1979). *La condition postmoderne: Rapport sur le savoir*. Les Éditions de Minuit.
- Mileti, D. S., & Sorensen, J. H. (1990). Communication of emergency public warnings. *Landslides*, 1(6), 52-70.
- 中谷内 一也・尾崎 拓 (2016). 災害準備に及ばず場面想定の効果検証——被災者を思い浮かべることが準備行動を促すか? —— 日本リスク研究学会誌, 26(3), 123-130.
- Niedenthal, P. M. (2007). Embodying emotion. *Science*, 316(5827), 1002-1005.
- Omer, H., & Alon, N. (1994). The continuity principle: A unified approach to disaster and trauma. *American Journal of Community Psychology*, 22(2), 273-287.
- Pham, L. B., & Taylor, S. E. (1999). From thought to action: Effects of process-versus outcome-based mental simulations on performance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25(2), 250-260.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative knowing and the human sciences*. State University of New York Press.
- Rosenstock, I. M. (1974). Historical origins of the health belief model. *Health Education Monographs*, 2(4), 328-335.
- Rosenstock, I. M., Strecher, V. J., & Becker, M. H. (1988). Social learning theory and the Health Belief Model. *Health Education Quarterly*, 15(2), 175-183.
- Rothman, A. J., & Salovey, P. (1997). Shaping perceptions to motivate healthy behavior: The role of message framing. *Psychological Bulletin*, 121(1), 3-19.
- Stanovich, K. E., & West, R. F. (2000). Individual differences in reasoning: Implications for the rationality debate? *Behavioral and Brain Sciences*, 23(5), 645-665.
- Taylor, S. E., Pham, L. B., Rivkin, I. D., & Armor, D. A. (1998). Harnessing the imagination: Mental simulation, self-regulation, and coping. *American Psychologist*, 53(4), 429-439.

- Tversky, A., & Kahneman, D. (1974). Judgment under uncertainty: Heuristics and biases. *Science*, 185(4157), 1124–1131.
- Weick, K. E. (1995). *Sensemaking in organizations* (Vol. 3, No. 10.1002). Thousand Oaks, CA: Sage publications.
- Wilson, T. D., & Gilbert, D. T. (2003). Affective forecasting. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 35, pp. 345–411). Academic Press.

Deliberative Narrative Generation Model: A Theoretical Framework of Meaning-Making Processes Supporting Action Readiness

Kana YAMAUCHI

This study theorizes the psychological basis of the intention–action gap, in which people understand what they should do but fail to act. It proposes the Deliberative Narrative Generation model, which conceptualizes future understanding as a cyclical process of integrating causal reasoning, emotions, values, and bodily sensations through exploration, construction, and examination. A classroom practice on preparedness for railway emergencies was conducted to explore the model's applicability. Activities that combined future narrative generation with plot-based and causal examination helped refine students' representations of future actions. Further analyses showed that initial Dominant Personal Narratives (DPNs) shaped early exploration and construction and were reconsidered through collaborative examination. Implications for refining the model are discussed.

Keywords: deliberative narrative generation, action readiness, dominant personal narrative (DPN), mental simulation, collaborative revision